

## 社会調査の方法に関する研究会 通算 20 回の開催達成に寄せて

井上 芳保

今回は、諸般の事情で掲載が遅れていた第 18 回の方も含めて過去二年分、二回の研究会の記録計四点を一挙に掲載する。

第 18 回の研究会は、「質的調査の教育実践」という共通テーマのもとに 2004 年 3 月 15 日に開催され、後藤範章「集合的写真観察法」と、有末賢「生活史法に基づく教育実践」の二報告がなされた。

第 19 回の研究会は、「調査と取材の接点を探る」という共通テーマのもとに 2005 年 1 月 29 日に開催され、蘭由岐子「これはもはや社会調査ではないのか——ハンセン病者研究とその展開」と武田徹「調査と取材の視点——アカデミズムとジャーナリズムはいかに出会い、いかに隔たるか」の二報告がなされた。

以下では、今回掲載する四つの報告を簡単に紹介し、それらに対する若干の私的コメントを添えておくことにする。

後藤さんは、自分の勤務校が「社会調査士」資格の導入に積極的であると断った上で、質的調査についてはさまざまな工夫が必要であり、新しい方法が求められるようになっていくことを説いた。そして実習の授業では学生たちに街角で目撃した風景に関心を寄せる実習を行っていることを中心に報告した。その中で「東京」を写真によって描き出すプロジェクトの紹介もなされた。写真を撮ることによって人々の生活ぶりや場合によっては意識までもが映し出されるという。それは学生一人一人が自らの生活世界や身体を介して社会

的リアリティに迫り、なおかつ社会学の面白さや奥深さを“体感”できるような「実習」の試みといえる。後藤さんは「私たちが生きている社会、その中でうごめいている人間、現実の細部の中に宿っている「社会的な意味」や「人々の意図」をくみ取って、文字通り動詞型の「社会学すること (Doing Sociology)」に学生たちが内発的・積極的に取り組める新しい方法の開発・実践」を目指している。

後藤さんの提示しているのは斬新な発想に基づく方法だといえよう。確かに写真などの図象には言葉によってよりも遥かに多くのものが表現される可能性がある。またこの非参与的な方法はインタビューのような対人的相互行為の気苦労なしに実施できる。対人的なコミュニケーションが苦手な学生たちにとっても取り組みやすい方法であることは確かだ。本学の調査実習でも導入を検討してよい提案がなされていると思われる。

有末さんは、「社会調査士」資格に参加する大学が少なくない中でその導入に消極的な勤務校にいる立場だからこそ言えることもあるとして、質的調査の教育として何が大事と考えているのかを中心に話した。例えば、社会調査の研究を学問としてさらに深めるには社会調査史をもっと調べる必要があると指摘した。庶民の生活を丹念に調べた月島調査や中野卓『口述の生活史』は先駆的な仕事といえる。質的調査法は、範囲が広く、あらゆるものと隣接しているのであり、「文学、歴史学、精神分析、文化人類学、マスコミ論、メディ

ア論などまで含まれる」とした上で、質的調査に役立つ背景知は実に広いのであり、資格の認定要件を特定の科目に限定していくやり方には無理を感じると述べた。またテーマ設定が自由な点に社会学の大きな強みはありとの指摘もあった。例えば、同じ現象を調べていても福祉や医療や看護という枠に囚われずに柔軟に捉えていくことができる。そして特に質的調査ではこの強みを活かせるという。調査する立場の中立性という指摘もあった。社会学というスタンスをとることの利点ということに注意が払われている。

有末さんは社会学を大切に考えている。過去の調査の蓄積やデータアーカイブを大切にすべきという指摘もそこから出ている。有末さんのこうした流れのお話を聞いていて、今「社会調査士」という資格を作ることの学問にとってのメリットとして何があるだろうと考えさせられた。質疑応答で発言したことでもあるが、例えば、警察や自衛隊や医師や裁判官の世界などこれまで調べる価値が十分に認められながら実際にはなかなか調査しにくかった領域に踏み込んでいく権威づけに役立つなら「社会調査士」は設置の意味が大いにあるといえよう。それは以前に北海道社会学会会長が切望していた「社会学の地位を高める」ことにもつながる。

蘭さんは、ハンセン病の研究に入った経緯を説明する過程で学生の時に実習で体験したアンケート調査への違和感について語った。例えば、息子を交通事故で亡くしたばかりの家を訪れて調査票を置いてくること、零細経営で忙しい人に学術調査だからという口実で仕事の時間を割いて生活調査に協力してもらおうとすることの暴力性に触れている。それを突破する方法を蘭さんは、エスノグラフィを書く方法にあるいは参与観察に求めた。蘭さんがテーマとしてハンセン病の問題を選ぶことになったのは熊本在住時に教えていた看護学校でのある出会いがきっかけであった。

ハンセン病の歴史を辿ると「想像を絶する世界」に直面する。蘭さんを調査へと駆り立てたのは過酷な状況を患者たちはどのようにして生きてきたのかへの強い関心である。初対面の際に患者から一挙手一挙動を凝視されていた体験などを紹介し、患者の語りを聞き取る「わたし」の位置どりを明確にし、語り手と密な相互作用を形成していくことからしか聞き取り調査は実現しないと説く。そのようにして得られた聞き取りの成果はしばしば患者から感謝されるものになるという。

私にとって蘭さんのお話はライフヒストリー研究の厳しさと面白さを十分に伝えてくれるものであり、たいへん得るところが大きかった。また調べにくいことを調べていく過程で、何か大きな「痛み」を抱えて生きて来た人であろうと人間として誠実に接していけば、その社会的なアウトプットについても理解し、受容してくれるのだということについてははっきり示して下さった気もしてたいへん励みになった。

武田さんは、自分が世に出してきたいくつかのお仕事の紹介から始め、まず文系・理系という枠を超えてテーマを追求するスタイルをとり続けることの意義を説いた。新京の都市計画という視点で満州国建国を捉えた『偽満州国論』、ハンセン病への排除の歴史を取り上げた『隔離という病い』、原子力平和利用技術の受容の過程などを扱った『核論』の三者に共通するのは近代文明の日本的な受容の形を調べること、共同体と公共性の緊張関係を検討することという二点である。武田さんはジャーナリストの世界に方法論が欠如していることを痛感したという。『知の探偵術』にはそれを踏まえてどういう形で情報を調べればよいかまとめられている。大学での教育に携わるようになってからは、何でも自分でやってみること、横断的知識、批判的思考の三つを重視している。また一人でも情報を発信することのできる力を身につけさせること

をねらいとしている。後半ではインタビュー観の変遷史の整理をした。①シンプルなインタビュー観および②解釈的客観主義（桜井厚が命名）ではまだ実際に語られた体験から実体験に遡ることができる信じられているが、③対話的構築主義（桜井厚が命名）となると、語りの背景に客観的事実があることが必ずしも担保されない。対話的構築主義はジャーナリズムの可能性を根底から覆してしまいかねないとして事実を知るための戦略的な情報収集の方法について語った。傍受などの技法を含めたジャーナリズムに特有の無手勝流のメリットについて述べた。取材源の秘匿にも触れた。

武田さんのお話を聞いて私が感じたのは、ジャーナリズムの世界で仕事をする人のたくましさである。あくまで事実を追及する態度をとり続ける執念には敬意を表したいと思った。昨今の社会学は構築主義の全盛という感もあり、「語り」とはインタビュアーとインタビュイーとの相互作用の関係性の中で構築されたものであるにすぎない、それは事実関係とは別物であるとして処遇すべきという見解が支配的である。誠にその通りなのだが、それだけにプロのジャーナリストとして「事実」を徹底的に追い求める武田さんのお話は何か新鮮な主張として耳に残った。「ジャーナリストと社会調査の接点を探る」という今回のテーマゆえにこそ見えてきた視点であろう。これもやはり今後の調査実習で参考にしていきたい貴重な視点である。

\* \* \*

ところで、この研究会は 1993 年以来、年 2 回ないし 1 回のペースで続けられてきたが、今年度は第 20 回目の開催を迎えることになる。20 回というのは一つの節目となるので、末尾にこれまでの開催記録一覧を記しておきたい(表 1 参照)。1993 年夏の第 1 回から今年 1 月の第 19 回までに計 24 人もの先生がはるばる本学まで足を運んで下さったことにな

る。それぞれたいへんお忙しい中、本研究会にご協力下さったことを改めて感謝申し上げたい。

振り返ってみるとこの研究会は 1993 年度に優れた社会調査や授業実践をしている研究者をお招きして報告していただくことによって、①本学部の社会調査の授業をよりよいものにするのに役立てる、②研究会の機会が少ない北海道地区において近隣の大学の研究者に示唆を与える、という趣旨で予算申請して認められ、設けられたものである。その設立趣旨は今日なお活かしているといえよう。毎回、学部の教員のみならず、そのテーマないし報告者に関心をお持ちの多くの方が参加して下さい、質の高い研究会が維持されてきたことを喜びたい。

本学部には当初「社会情報調査論」「社会情報調査実習」という科目があったのだが、カリキュラムの変更によってそれらはなくなった。それに伴って本研究会の名称も「社会情報調査の方法に関する研究会」から「社会調査の方法に関する研究会」へと変わった。すなわち、「情報」が抜けたわけだが、「社会調査」というより一般的な、よりなじみのある概念になったことでさまざまな意味で自由度は増したといえよう。そもそも社会学という学問分野はその対象とするものの幅がたいへん広く、その中には「情報」も当然含まれるのであり、この変更によって「情報」系の内容を除外したというわけでは少しもない。また「方法」となっているが、調査の「方法」は調べる対象によって変わる。興味深い対象を調べている研究者のお話を聞く場としてもこの研究会は有効に機能してきた。

この研究会の成果からは、例えば、好井裕明さんがその報告をもとに論文化して本学部紀要『社会情報』3 巻 2 号に掲載の「螺旋運動としてのエスノメソドロジー」が著書『批判的エスノメソドロジー』（1999 年、新曜社）に収録されるなど、アカデミズムの場で高く

評価される内容の仕事が現れている。研究会を通して得られた成果はまた我々の日常的な授業実践にも反映されてきた。本学にて社会調査関連の授業に携わる者として、よりよい

授業を心がけることが本研究会の価値をさらに高めることになるのであろう。さらなる発展を期待したい。

表 1 社会情報調査の方法に関する研究会 開催記録一覧

回	開催日	報告者	現在の所属	報告テーマ	紀要記録
1	1993/ 6/ 4	大石 裕	慶応義塾大学	地域情報化研究の課題	
2	1993/ 7/29	好井裕明	筑波大学	螺旋運動としてのエスノメソロジー	3-2
3	1994/ 7/28	高橋和子	敬愛大学	非定型データの分析方法	4-2
4	1994/10/ 7	吉見俊哉	東京大学	国民祭典論のための序論的考察——運動会の思想	
5	1995/ 7/ 1	瀬地山角	東京大学	東アジアの家父長制	5-2
6	1995/12/16	松田博公	共同通信社	オウム報道の構図と問題点	5-2
7	1996/11/ 7	亘 明志	長崎ウェスレン大学	メディアと権力	6-2
8	1997/ 3/ 8	山崎晶子	はこだて未来大学	差別のエスノメソロジーから Media Space Project へ	
9	1998/ 1/31	谷 富夫	大阪市立大学	エスニシティ研究における「世代間生活史法」の試み	7-2
10	1998/ 3/ 3	大谷信介	関西学院大学	都市的状況と友人ネットワーク——5大学比較調査の試み	
11	1998/12/12	高橋 準	福島大学	ポピュラー文化研究における概念と分析装置	8-2
12	1999/ 2/27	蘭 信三	京都大学	満州移民研究における社会学的方法の可能性	9-2
13	2000/ 1/29	辻 勝次	立命館大学	阪神・淡路大震災と社会断層——災害調査のフィールド体験	10-1
14	2000/ 1/29	川端 亮	大阪大学	非定型データのコーディングとその利用——信仰における霊能の意味へのアプローチ	10-1
15	2001/ 2/17	荻原雅之	(株)ネットレイティングス	インターネット調査の現状と課題	11-1
		藤本一男	作新学院大学	インターネット技術に媒介された教室のインターアクション	11-1
16	2002/ 3/ 2	井川充雄	静岡大学	地方紙の基本的枠組と現在の課題	12-2
		鈴木健二	成蹊大学	21世紀の地方テレビ局	12-2
17	2003/ 3/14	吉村卓也	北海道東海大学	シビックメディアと市民によるジャーナリズム	13-2
		津田正夫	立命館大学	地域市民からの発信の可能性と課題——日本型パブリック・アクセスは可能か	13-2
18	2004/ 3/15	後藤範章	日本大学	集会的写真観察法	15-1
		有末 賢	慶応義塾大学	生活史法に基づく教育実践	15-1
19	2005/ 1/29	蘭由岐子	神戸市看護大学	これはもはや社会調査ではないのか？——ハンセン病者研究とその展開	15-1
		武田 徹	東京大学	調査と取材の接点——アカデミズムとジャーナリズムはいかに出会い、いかに隔たるか	15-1
20		検討中			